

台湾「蓬莱米」の親は「亀次米」だったという話

全国山村振興連盟事務局長 實重重実

本年1月に、本連盟の島根県支部理事である田中武夫・安来市長とお話をしました。島根県安来市は私の故郷で、広瀬町と合併した後は、地域の多くが山村地域となっています。

その話の中で私は、環日本海に目を向けて国際的な友好親善を広げてほしい、という要望を申し上げたところ、田中市長から台湾の新北市との間で近く友好協定を締結する予定だという話を聞きました。日本海側の地域は、古代から環日本海のアジア諸国との交易を通じて発展し、それが木材や鉄の供給基地であった山村も発展させてきたのですから、大変良いことだと喜びました。

そしてその話の中で私が驚いたのは、田中市長が台湾に行かれて「蓬莱米」の話が聞かれたことについてでした。蓬莱米というのは、台湾の主要な米の品種であり、ジャポニカ米とインディカ米を掛け合わせて作った品種だとされています。日本より気温が高く日照時間も長い台湾での生産に適しています。現在では世界への半導体の供給基地となっていて経済発展著しい台湾ですが、そこで生産されている米のなんと98%が蓬莱米なのだそうです。台湾が誇る美味しい米として、世界に向けて輸出もされています。台湾の中華料理店で蓬莱米を食べたことのある方も多いのではないのでしょうか。

私が驚いたというのは、蓬莱米に掛け合わされたジャポニカの品種というのが、「亀次米」（かめじまい）だったということです。亀次米と言ってもほとんどの方にはぴんと来ないと思いますが、田中市長はもともと農業者の出身であり、全国のモデルとなる圃場整備事業を成功させた功労者だったほどの人ですから、「亀次米」と聞かれてすぐに分かったのだそうです。

実は亀次米というのは、戦前に広田亀次という安来市出身の育種家が、手塩にかけて生み出された稲の品種なのです。荒島駅の前には広田亀次氏の銅像が立っています。亀次米は冷害に強く多収であり、明治から昭和の初期にかけて西日本一帯で栽培され、冷害や恐慌の時代に多くの人々の命を救った米だったのです。

台湾が植民地だった時代に、台湾在来のインディカ種と日本のジャポニカ種を掛け合わせたときに、亀次米が親として用いられ、そして蓬莱米が生まれたということなのでした。

田中市長はその話を聞いて台湾と安来市の奇遇なる絆を知って感激されたようですが、私も大変感動しました。実は私にも、亀次米との浅からぬ奇縁があったからです。

平成5年に私の両親が父の故郷である安来市荒島地区に移転してきたとき、奇しくも広田亀次氏の生家をお借りして起居することになりました。荒島地区には活性化協議会という市民団体があるのですが、そのお世話で私の父は、「王陵の丘」という古墳公園の管理人をすることになりました。そしてあるとき、活性化協議会から依頼されて、父が私に「亀次米の種籾が手に入らないだろうか」と言ってきました。亀次米を栽培して、地域活性化をしたいということだったのです。

当時農林水産省の職員だった私が各所に問い合わせたところ、生物資源研究所のジーン・バンクに亀次米の種籾が保存されていることが分かりました。当時は試験研究用であって、研究者にしか配布できないルールだったのですが、農林水産技術会議からは特認条項を使って、有償で数十粒の種籾を分与してもらうことができました。（その後「地域活性化用」としても使用できるように、通達 改正がなされました。）

それは平成7年のことであり、掌に乗るほどのわずか数十坪の種籾をもらい、3人の農業者の方が分け合って、丹精を込めて亀次米を育てられました。その一人が父の友人・松浦実さんだったので、私も帰省したときに亀次米の水田を見せてもらったのですが、2年目には水田一杯に米が実るほどにまで、みごとに育成されていました。当時、地元紙に掲載された写真には、背丈の高い亀次米の稲を持ったこれらの農家の方や活性化協議会の役員に加えて、私の父まで写っています。

あれから20数年という時が経ちましたが、亀次米はその後もずっと継続して地域活性化に用いられ、今も小学校5年生の子供たちが中心となって栽培するイベントとして受け継がれているとのことでした。

日本では忘れ去られそうだった亀次米を復活して地域活性化に用いられた安来市民も立派ですが、台湾を代表する米となった蓬莱米の親の名前を覚えていただいている台湾の方々も立派なものだと思いました。

台湾は地政学的に難しい立場にあるわけですが、こうして食や農業、植物を通じた地域と地域の絆が海を越えて思い起こされ、新たな国際友好親善の芽となっていくことを願わずにいられません。